令和6年度 共生社会コンファレンスの報告

東京都教育委員会は年に1回、障害者の生涯学習の普及・啓発を目的としたシンポジウム（共生社会コンファレンス）を実施しております。障害の有無にかかわらず、共に学び生きる共生社会の実現を目指し、コンソーシアム参加団体であるNPO法人ピープルデザイン研究所主催のフォーラムイベント「超福祉の学校」※4の中で開催しています。

シンポジウムは東京都手話言語条例※5に基づき、手話による同時通訳を実施しています。さらに、企業の協力により、発話者の発言を音声認識し、即座に翻訳・テキスト変換することで、発言内容を複数端末にリアルタイムで翻訳・テキスト表示するダイバーシティ・コミュニケーションツールが導入され、字幕も付いています。

シンポジウムは、配信で御覧になる方が多いのですが、当日は大勢の方に会場までお越しいただきました。

東京都教育委員会では
これまで、右記のシンポジウムを
実施しました。

令和4年度
- “豊かに生きる”ための生涯学習

令和5年度
- インクルーシブな生涯学習活動を充実させるために必要なこと
  ～文化芸術活動を事例に～
- Z世代とつくるインクルーシブな交流の場

今年度は「インクルーシブ社会の実現を目指した学びへの取組」と題し、難病を抱えながら障害者モデルとして活動し、都立高校を卒業後、今春から大学で社会福祉を学んでいる玉置 陽葵さんをゲストに迎え、第一部では玉置さんのインクルーシブ社会への思いについてうかがいました。第二部では、玉置さんが提案し東京都教育委員会が事業化した「インクルーシブ体験」プログラムのなかで、玉置さんとともに同世代の3人が作り上げたプログラムを事例に、インクルーシブ社会の実現を目指した学びについて考える時間となりました。

登壇者

- 玉置（たまき） 陽葵（ひより） さん ｜ モデル／上智大学 1年
- 豊嶋（とよしま） 有希（ゆうき） さん ｜ 認定NPO法人ハンズオン東京 インターン／国際基督教大学 卒業
- 坂本奈々美（さかもとななみ） さん ｜ 認定NPO法人ハンズオン東京 プログラム参加者／国際基督教大学 3年
- 寺澤（てらさわ） 裕太（ゆうた） さん ｜ ミカンベイビー合同会社 代表／慶應義塾大学 3年

聞き手

- 堀井（ほりい） 美香（みか） さん ｜ フリーアナウンサー

シンポジウムはライブ配信に加えアーカイブ配信も行っています。場所と時間を飛び超えて、いつでもどこからでも全編、御視聴が可能です。
https://peopledesign.or.jp/school/symposium/2434/

※4 「超福祉の学校」は2018年から開催されており、従来の教育や特別支援教育、障害福祉の枠に収まらない、多種多様な方々がシンポジウムに登壇しており、国内のみならず海外ともオンラインで繋ぎ、世界各地の最先端の学校教育、インクルーシブ教育や生涯学習等に関する具体的な事例やアクションを、渋谷から発信しています。詳しくはHPを御参照ください。
(https://peopledesign.or.jp/school/)

※5 障害者の権利に関する条約では、言語は音声言語及び手話その他の形態の非音声言語をいうとされ、障害者基本法でも、手話が言語に含まれることが明記されています。東京都では、ろう者、難聴者、中途失聴者など手話を必要とする者の意思疎通を行う権利が尊重され、安心して生活することができる共生社会の実現を目指し、令和4年9月1日からこの条例が施行されました。

シンポジウム
symposium

第１部 インタビュー
interview

第一部では、玉置さんのこれまでの足跡と、インクルーシブ社会への思いについてインタビュー形式でお聞きしました。

オープニングでは先天性筋ジストロフィー（ウルリッヒ型）※6を患いながらも、モデル活動を行っている目的や活動の先にある共生社会に対する考えについて。

続いて、難病であることを自覚し、内向きだった幼少期の時のエピソードや、困難な場面で友達に頼ることができず、遠慮していた中学時代について。

そして都立高校に入学し、学年集会で自分の障害や「障害があるからといってお互いに遠慮してしまうことは避けたい」と学年の仲間たちに話したことで、積極的に友達と助け合いながら、自分らしく充実した学校生活を送れたことについてお聞きしました。

最後に、大学で福祉の領域を学んでいる理由や、同世代の当事者で組織された患者会※7の活動を通じて得たことから、インクルーシブな社会とは、障害の有無に関わらずバリア（障壁）をなくすために、お互いに交流を大切にし、誰もが選択肢を多く持てる社会（日常生活だけでなく進学、就職、趣味等も含め）ではないかという思いが語られました。

第２部 トークセッション
talk session

第一部に引き続き、玉置さんと同世代の登壇者3名を迎え、４人がチームとなって作り上げたインクルーシブ体験を目的とした教育プログラムを事例に、インクルーシブ社会を実現し、障害のある方をはじめとする様々な人たちと生活していく上で求められる学びの視点について意見交換を行いました。

登壇者のそれぞれの活動を含めた自己紹介の後、プログラムを作るために集まった経緯や、プログラムを作成する際に話し合った内容などに触れ、「アクションを起こせる知識と（障害のある方と触れ合う）少しの経験」、「様々な人との対話をあきらめない態度」、「（障害がある方との交流などで）身構えない姿勢」や「お互いを知ること」といった視点を、具体的な事例を伴い、示しています。

※6　公益財団法人難病医学研究財団が運営（厚生労働省補助事業）する難病情報センターHPによると、先天性筋ジストロフィー（ウルリッヒ病）とは、生まれた時から力が弱い、肘や膝の関節が固くなって十分に動かせない（関節拘縮）、手首や手指の関節が過度に柔らかいなどの特徴をもつ病気です。日本では、福山型先天性筋ジストロフィーについで２番目に多い先天性筋ジストロフィーで、報告されている患者数は約300人ですが、実際はもっと多い可能性があります。（https://www.nanbyou.or.jp/entry/3999）

※7　玉置さんは「ウルリッヒ病・ウルリッヒ型先天性筋ジストロフィー患者家族会 ウルリッヒの会」の副代表を務めています。活動の詳しい内容は会のHPを御参照ください（https://www.ullrichdisease.com/withus）